



Propose

新保 章

明日のあなたに

明日のあなたに

ある晴れた夏の初め
爽やかな風の吹く午後を
あなたと肩を並べて歩けば
それだけで僕は満足をして

街路樹の木洩れ日
その陽射しに照らされるあなたの
横顔がキラキラとして
その眩しさがただ嬉しくて

手の届きそうな青い空に
腕を差し伸ばして
明日の空をまた
あなたと迎えたくて

ただそれだけでいいのだけれど
ただそれはあなたしかなくて

ねえ覚えているかい
ブルームーンが覗いていた
青すぎる窓辺の印象を
そこに浮かび上がるあなたのシルエット

明日あなたに会えるまでの時間は
あまりにも果て無く
一人で眠る夜の深い暗闇
そこに潜り込む寂しさを思っ

あなたの瞳と出会わない日は
もう僕の中には無くなって
あなたのいない明日はもどかしすぎて

僕が夜明けに悲しい夢を見て
目が覚めるとしたならば
その横にあなたがいて
その胸の中で眠ることにして

あなたと分け合える
明日があるとしたならば
あなたのいない明日を
もう考えることはできなくて

小さな嬉しさ

小さな嬉しさ

最初は本当に
小さな小さな嬉しさであって
偶然に出会った瞳との会話に
吸い込まれて身動きがとれずに

散った火花に明るくなる心の
心地よい驚きにあなたの姿を
僕はいつでも視線の先に
探す者になっていつからか

あなたは果たして
覚えていてくれるだろうか
初めてあなたの手に触れて
悪いことをした子供の様に
ばつが悪くて逸らした僕の視線
拾ったあなたの微笑みに
どれだけ僕が救われていたかを

その微笑に報いるだけの物を
あなたに返せたことがあったのかは
まったくをもって自信がなくて
僕は与えてもらう
一方だったのだと思うけれど

ゆっくりとした時間が守ってくれた
素直に育った信頼感であり
変わらない楽しさであり
日々の繰り返しと一緒に
過ごす当たり前であって

あなたと一緒にいることが
陽射しに満ちた日々に浴する
術であることを疑いなく信じている
僕をもう疑うことはできなくて

小さな嬉しさが育まれ
大きな喜びになって
それは偶然でもあり
僕の意志でもあり
あなたの意志でもあって

その先にあなたと僕が
まだこうしていることを
ただ嬉しく思う僕がいて

あなたと繋いだ手の確かさを
もう放そうとは思はない

だから離れない手
自然と微笑あうことの
小さな小さな嬉しさ
すっかりと大きくなって今は
決して僕は失いたくはなくて

心寄せることで

心寄せることで

少しだけでも僕に
心を寄せてくれる人がいることの嬉しさ
それが幸せであることを思った日

潮風が優しく顔に吹いた日
海原が青い穏やかな歌
口ずさみ止まなかった日
あなたの口から零れる言葉が
僕にくれる力に驚いて
あなたの手に初めて触れた日

僕は僕の夢に憧れ止まない生き方をしている
いつまでも終わらない夢の続きに苛まれながら
いつまでも届かない夢の遥かさに放心しながら

夢見る人を嗤うのは
夢見ることを怖がる人たちの群
目覚めた時の冷たさと
手に残った寂しさにもう飽き飽きとして

夢はけっして破れない
夢を見続ける限りにおいてはと
苦しくも呻く僕の強がりにも
微笑むあなたの言葉はいつでも
僕の耳の奥に残る不思議な調べ
僕をその先の明日へと誘ってくれる

「ボクハダメナモノダ」と
自分を卑下する一人の夜を
重ねる毎に思い出す人がいて

あなたはどこから来たの
あなたの側に入ることで
確かに力を覚える心
僕自身さえどこから来たのか
知らない心細さも後回しに

あなたの周りにいつからか
僕は心を置くようになって
僕はそれで強くなれるように感じて
いつまでも終わらない夢を
あなたと分かち合えるように
僕は夢見ることが止めない

その後の午後に

その後の午後に

紅茶を飲んでいる
あなたの口元を眺めながら
漂うその香りに胸を満たされている
秋の静かな午後の一瞬
あなたは何を見るでも無く窓の外を眺め
その横顔を眺める僕がいて

夜遅い駅で電車を待つ僕が一人
思い出しているその顔を
また心の中で描き直してみる

顔を合わせられない夜にでも
感じられる心の繋がり
あなたの息遣いを傍らに
離れた距離を感じない程に

あなたと代わる代わる水をあげる
窓辺の鉢植えはいつの間にか背を伸ばす
あなたと僕との間にも目に見えぬ
日々に育って行く物が確かにあって

それは毎日の会話に育まれて行く物
明日に夢見ていることも
他愛の無いことも養分として
ゆっくりと伸びて行く物だから焦らずに

いつしか自然と寄り添い合うことが
似つかわしい二人の距離となって
物思う時にも肩を寄せ合うことにして
何も思わない時間も
体の重さ静かに預け眠る様にして

まるで僕の心を読んだかのように
目を合わせ微笑むあなたに
心を偽る必要は無く
無理をしない心は軋みを上げずに

いつしか覚えたあなたの紅茶の好み
好きな香りは僕にも沁み込み
また一つあなたを覚える明日に
楽しみに思いを馳せている

その先の空へ

その先の空へ

それから先もまた
あなたとの日々を重ねることができれば
手をつないで一緒に
歩くことの楽しさ忘れることは無く

満開の桜の花の下で
あなたと寝転んで見た柔らかな空の色
夏の海で触れた水の思わぬ冷たさ
秋の枯葉の色合いはどこか寂しくて
真っ白な雪の降り積もる屋根の下
交わした囁きは耳元に温かく

そうして重ねる
小さな出来ごとの一つ一つを
心に綴り大切に作る僕だから
あなたのことを思うたびに
胸が温かくなる
一緒にいられないことが不自然で

同じようにあなたが
感じてくれることがあれば
それが僕の希望するところであって
もう待ちわびる明日も無くて
あなたの微笑を守りたいこと
それが僕の嬉しさとなって

直ぐにでもそれは
どこかに飛び立つことを希う
見失いがちな心持の僕の
この世の重しとして
いつまでも感じていたい物

その先の空を映すあなたの瞳
その穏やかな色彩に憧れ続けながら